

インクルーシブ教育とは？

インクルーシブな学校をつくることに、唯一の正解はありません。
できることから、一つずつ進めていくことが重要です。
インクルーシブ教育は「ゴール」ではなく「プロセス」です。

*Inclusion is a **process**. That is to say, inclusion has to be seen as a **never-ending search** to find better ways of responding to diversity.*



戸田型インクルーシブ教育

目指す教育

誰一人取り残されない教育
多様性を尊重し、すべての子どもが安心して学び、成長できる教育

前提となる5つの大切

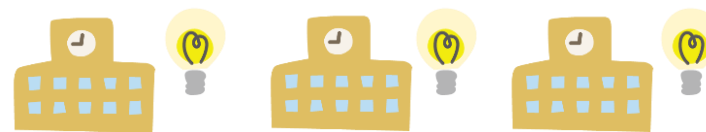
①“特別支援教育のこと”ではなく、
“学校全体のこと”と捉える

学校経営、学級経営、授業改善の
3つの軸から考えていく



②各学校の「取り組みたい」、
「取り組みそう」から始めていく

既に各学校が取り組んでいることを土台に。
各学校が取り組みやすいところから



③各学校と市教委の共創で
進めていく

市教委と各学校が一緒に考え、
これまで以上の伴走支援で



④急がず、少しずつ着実に
始めていく

インクルーシブ教育の浸透は時間が
かかるもの、継続的に繰り返し



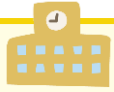
⑤誰か1人がやるではなく、
全員でやっていけるものに

学校全体で変わって
いけるものに



戸田型インクルーシブ教育

柱Ⅰ 学校経営

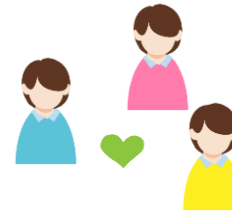


困ったときに、“一人で抱え込まなくていい”学校の仕組みをみんなでつくる。

①
教師同士がインクルーシブな環境
になっている



②
教師が安心してインクルーシブ教育を
実現できる環境になっ
ている



柱Ⅱ 学級経営

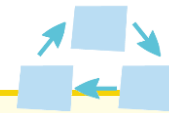
子供の違いを前提に、教師も子供も
安心して自己実現できる学級をつくる。

②
すべての児童
生徒にとって
安心な学級になっ
ている

①
すべての
児童生徒が
多様性を尊重
しあっている



②
多様な子供が
それぞれ学び
を深めている



柱Ⅲ 授業改善

「予防的支援」を増やして、子供の学びを止めない。
教師の後追い対応を減らす。

戸田型インクルーシブ教育モデル ver.1

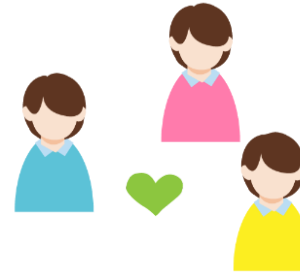
柱Ⅰ 学校経営

困ったときに、“一人で抱え込まなくていい”学校の仕組みをみんなでつくる。

①
教師同士がインクルーシブな環境
になっている



②
教師が安心してインクルーシブ教育を
実現できる環境になっ
ている



ア



学校の実態に合わせて、学校経営方針等に「多様性を尊重し、すべての子どもが安心して学び、成長できる教育」の視点が入っているか

ア



教師の強み・好き・得意分野・専門性を活かしあう環境整備ができているか

イ



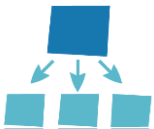
教師同士がチームで支援策について検討できる場が設定されており、機能しているか
(例：インクルーシブ教育部会、RTIミーティング、教育相談部会、生徒指導部会など、児童生徒の支援策を検討する場)

イ



児童生徒の具体的な支援方針が共有・更新されているか

ウ



校内でインクルーシブ教育を進める役割分担が明確になっているか

ウ



教師に対して個別にサポートができているか(管理職から教師、教師同士等)

エ



教師が安心して質問しあえる環境が整備できているか

エ



専門性のある者から助言を受けているか(例：特別支援学校のセンター的機能、巡回相談、その他有識者など)

オ



保護者や地域に積極的に情報発信をしているか

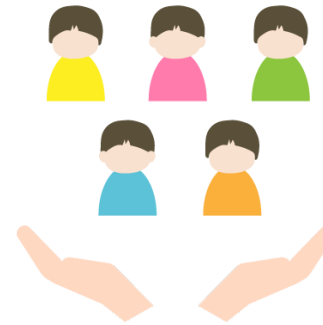
柱Ⅱ 学級経営

子供の違いを前提に、教師も子供も安心して自己実現できる学級をつくる。

①
すべての
児童生徒が
多様性を尊重
しあっている



②
すべての児童生徒に
とって安心な学級に
なっている



ア



困り感がある子への配慮が、特別扱いではなく学級の当たり前として共有されているか

ア



多層支援の考え方を活かした学級経営ができて
いるか（学校全体・学級全体でのPBSの実施、
学級経営リフレクションの活用など）

イ



児童生徒が多様性について考える授業が設定で
きているか（多様性理解授業、社会モデル授業な
ど）

イ



個別の支援を必要とする児童生徒への支援が検
討・実施できているか

ウ

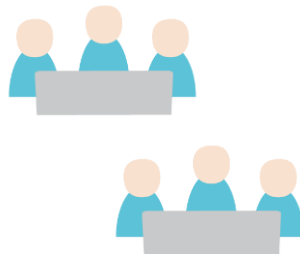


肯定的な声かけや、行動を具体的に伝える
関わりが学級全体で共有されているか

柱Ⅲ 授業改善

課題ややり方の選択肢を増やして、子供の学びを止めない。
「予防的支援」を増やして、教師の「後追い対応」を減らす。

①
多様な子供が
それぞれ授業に参
加している



②
多様な子供が
それぞれ学びを深
めている



ア



学習への参加方法や目標への到達の方法が一
律でなく多様になっているか（まなび教材の活
用など）

ア



多層支援の考え方を生かした授業設計をして
いるか

イ



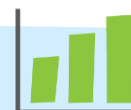
必要な児童生徒に対して合理的配慮がなされ
ているか

イ



個別最適な学び・協働的な学びが一体的に
進められているか

ウ



客観的な根拠をもとに実態を把握し、次の手
立てを考えているか（データベース、まなびプ
ランの活用など）